2010 年 03 月 26 日

平成 21 年度愛媛大学卒業式式辞.

本日ここに学位記を授与された 1808 名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。本日のこの晴れの式典には、先ほど紹介させていただきましたように、各界を代表する多数の来賓の皆様にご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃の本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、この 4 年間あるいは 6 年間、それぞれいろんな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、一人だけで乗り越えられたのではないことに思い当たるはずです。そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの暖かい支援や助言があったはずです。そのことを決して忘れてはなりません。

卒業する皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の一つの大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、いま自分がなすべきことは何かを考え、目標をしっかりもって努力すること、このことにぜひ取り組んで欲しいと思います。また、450 名程の卒業生は大学院に進学し、勉学活動を続けることになりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、大切なことは主体的に学ぶ姿勢を常に堅持し、本学で培った知の力をさらに向上させることです。

.

今日、国内的にも国際的にも変革期を迎え、あらゆることが流動的であり、先行き不透明な時代を迎えています。しかし世界の流れを大きく捉えると、多くの識者が指摘しているように、社会は産業社会から知識基盤社会へ移行しつつあります。知識基盤社会とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」であると定義されています。知識基盤社会では、次のことが起

こると予想されます。まず、知識に国境がなく、グローバル化が一層進むこと。また、知識は日進月歩で更新され、競争と技術革新が絶え間なく生まれること。そして、知識の進展によって旧来の考え方の枠組み、いわゆるパラダイム、が変化するため、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になることです。

このような時代においては、既存の知識体系を学ぶことよりも、自分で問題を見つけ、その解決に向けて自分で学ぶこと、すなわち主体的学習（アクティブ・ラーニング）がより必要とされます。皆さんはすでに実感していることと思いますが、見たり聞いたりしただけではなかなか知識は身につきません。相手に質問したり、相手と議論を戦わせたりすることによって、はじめて理解が深まります。そして、さらに誰かに教えることによってその知識が確実なものになります。すなわち、知識を本当に獲得するためには、質問したり、議論したり、教えたりする仲間の存在が重要です。

仲間の存在の重要性は実社会に出たとき特に顕著になります。これからの知識基盤社会では、プロジェクト的なチーム活動が多くなります。知識は個々人がもつものですが、個人がもつ知識はそれぞれ異なっています。異なる関心や発想をもつメンバーが集まって、考えを出し合い、徹底的に議論することによって、当初誰も気づかなかった新しいアイディアに到達することがあります。これがこれからの知の創造です。「三人寄れば文殊の知恵」ということわざがあります。昔の人も意見を出し合い議論することの重要性を認識していたのだと思います。日本人は議論が苦手であるとよく言われますが、議論をするのはけっして相手を感情的に攻撃することでも打ち負かすことでもありません。議論することの目的は、みんなで新しい知識を創造することにあるという認識がこれから大切になると思います。

さて、最近の我が国の状況について没落の道をたどりつつあるという悲観的な見方が広がっています。政権交代によって誕生した新しい政府も昨年 12 月末に定めた基本方針「新成長戦略」の冒頭で次のような表現を用いています。「私たちは今、長い衰退のトンネルの中にいる。９０年代初頭のバブル崩壊から約２０年、日本の経済は低迷を続けている。成長度合いでは、アジア各国、アメリカを始め欧米諸国にも大きく遅れをとった。経済は閉塞感に見舞われ、国民はかっての自信を失い、将来への漠たる不安に萎縮している。国全体が輝きを失いつつある。」このような悲観的な見解は、危機こそがチャンスであるという論旨のための誇張という側面がありますが、このような現状認識では国民は意気消沈してしまいます。

.

私たちは、我が国の将来に対して必要以上に悲観的になるべきではありません。日本は欧米以外の地域で最初に近代化に成功した国であり、その過程で蓄積して来た技術や知恵、ノウハウといったものの価値を過小評価すべきではありません。我が国は、例えば、高度成長期の負の側面である公害問題や二度にわたる石油危機を克服する過程で高いレベルの環境技術を開発してきました。また、世界一の長寿国であることが象徴するように、医療や健康に関する技術やシステムは世界に冠たるものがありますし、「安全・安心」に関わる社会システム、例えば、都市交通、水、エネルギーなどのインフラ整備に関しても高いレベルのノウハウを蓄積しています。これら以外にも我が国の強みは数限りなく挙げることができます。これから重要になるのは、我が国がもつ強みを正しく認識し、その技術やシステムをアジア地域などの海外に展開を図っていくことだと思います。

日本国内においては、中央と地方の関係を是正することが大きな課題です。我が国では経済発展の過程のなかで、一極集中の度合いが高まり、東京などの大都市圏だけが繁栄し、地方では人材が中央に流出して衰退するという現象が起こりました。この傾向はまだ歯止めがかかっていません。このままでは地方の衰退がもっと進み、その結果国全体の「足腰」が弱ってしまいます。

知識基盤社会における経済活動は、人材を集めることの競争であると言われます。いい人材が多く集まれば新しい技術が生まれ、企業が興り、それに伴ってさらに人材が集まり、企業が集積し、多くの人が住むようになる。そこに魅力ある文化が創られ、自律的な地方自治が育ち、さらに優れた人材が集まるという好循環が実現します。これをそれぞれの地方において実現させることが我が国の持続的な発展を保証するカギになります。

皆さんのような若い人たちが、これからの新しい社会をつくる担い手です。今日のような先行き不透明な時代においては、無力感におそわれ、個人的な関心事に埋没しがちになります。しかしこのような時代においてこそ、社会的な関心を失ってはなりません。皆さんがいま胸に抱いている理想を忘れることなく、日本および国際社会の発展のために多くの人と力を合わせて常に前向きな姿勢を貫いて欲しいと思います。

愛媛大学は平成 16 年に国立大学から国立大学法人になりました。今回卒業される皆さんのほとんどは法人化後に入学した人たちです。法人化後、本学は「地域にあって輝く大学」「学生中心の大学」をつくることを目標にしてさまざまな改革に取り組んできました。幸い、大学の使命である教育、研究、地域貢献、国際貢献のすべての分野で成果を上げ、愛媛大学は地方の大学で最も注目される大学のひとつになっています。

皆さんがこの愛媛大学で学んだことを誇りに感じ、ここで培った力をこれから遺憾なく発揮され、それぞれの分野で社会の発展を牽引する役割を果たされることを期待して、私からのはなむけの言葉といたします。

平成 22 年 3 月 24 日　愛媛大学長　柳澤 康信

平成21年度 愛媛大学 卒業式